

shachi

Illustration pikomaro

1

露ひ手の

の





星海社
FICCTIONS

手のひらの露 1

shachi

Illustration/pikomaro

1 A Drop on the Palm 手のひらの露



著
者

shachi

pikomaro

イラストレーション

ブックデザイン 有馬トモユキ

フォントディレクション 紺野慎一

校閲 鷗来堂

1	無くし物とGPS	7
2	見えない姿を追跡する	63
3	兄さんの仕事	107
4	過去と向き合う	141
5	漏洩対策ってどうするの？	179
6	反撃	215
	あとがき	250



会議は紛糾ふんきょうし、私は周囲から詰め寄られていた。

いらいらとした感情をぶつけられながら、椅子に深く腰掛けて腕を組み、開いているかわからないくらい細い目で、その状況を伺う。

——くだらない。

そのまま、たつぷりと周囲の難詰なんきつする声を聞いたのち、組んでいた腕をゆつくりとほどく。そして、一回息を大きく吐いた後、ようやく口を開いた。

「何か、ドーンと大きい発表があれば、儲けは出ます。……ドーンとね」

その一言で、会議室は静まり返った。

詰め寄るような強い声、「どうなんだ？」という声が一斉に止む。

まあ、こいつらは、私が前にもこういうことを言い、その後、確かに儲けが出たのを知っている。

この場にいる誰もが、これまでと同じことを私に期待しているのだろう。

——その、「何か」の大きさが問題であったのだが。

第1話

無くし物とGPS

1

A Drop on the Palm 1



最大のピンチ。

そういうものがあるとしたら、「今」なのかもしれない。

これまでの経験から近い例を探すとすれば、思い出すのはまず小学生の頃。さあ、そろそろ始まるというリレー。僕達が一位を取れないと、クラス全体がビリになる。その時、僕はアンカーだった。

高校生の頃のサッカーの試合。ここでゴールを決めれば勝てるのに……という時にも似ている。

なんで似ているかって？ 僕がミスをしたからだ。

昨日は大変疲れているなか、健也けんやなどの友人達三、四人（詳しい人数は残念ながら覚えていない）と、烏丸からすまの飲み屋で終電ぎりぎりまで飲んでた。

最後のほうは、最悪歩けばいいや……という気分だったはず、だ。

周りと別れてからの記憶が、全くないほど眠かった、というのが誤算で……いや、疲れれば眠くなるのは誤算ではなく、当然なんだけど。

……で。

今日の朝、気がついたら家の自分の部屋で寝ていた。

飲み屋から家まで、どうやって帰ってきたのか見当がつかない。普通は、最寄り駅までは電車で、そこから歩きなんだけれども、昨日は電車だったのか、タクシーだったのか、それともバスだったのかもまったく不明だ。

財布とかばんは無くしていなかったものの、前日に下ろした、全部で一万円ほどのお札はなくなっていて、残っていたのは数百円の小銭だけ。ということは、お札は使ってしまったのだろうけど、レシートすらなかったのでよくわからない。

そして、ぼんやりしていると昼前に山田先輩から呼び出しの電話があり、大学で先輩と落ち合って、強い口調で怒られた。

そうして、最悪の状態、というのを我ながら今更ようやく自覚したところだ。

先輩との話はこういう内容だった。

菊宮きくみや（僕のことだ）に借したノートパソコンを明日までに返せ。返せなければ弁償として四〇〇万払え。なぜなら、あのパソコンの中には取引に必要な資料が入っている。だから、それがなくなっても弁償しろ。

四〇〇万円、という法外な値段には驚いた。しかも、その金額は、どうやっても下げることはできないとも言われた。

弁護士に相談したところで、こういう事は民事事件になるから呼ぶだけ損だ、とも言われた。

お先真つ暗というか、無くしたのは僕だから仕方のない部分はあるにしろ……四〇〇万円？　なんで？　納得全然できないんだけど。

でも「とにかく探せ」と言われれば、確かに僕が探さないとどうしようもない……。とはいえ、僕の行動だとしても、僕自身が覚えていないんだよなあ。

……待て。

まずは待て、落ち着け。落ち着こう。そう、深呼吸して。

うん。少し落ち着いてきた。こんな時、兄さんはなんて言ってた？　そうだよ、確か、

「まずは、どうしてそうなったのかの整理が重要だ」って。そうだよ。まず一から整理しよう。

* * *

ただすの糺ノ杜大学は会計学研究会の部室。

ぼつんと一人でいると、普段ぎゆうぎゆうの部室もなにか寂しいものがある。

僕自身はこの部活に所属していないが、ノートパソコンを貸してくれた山田先輩が所属しているので、この場所に呼び出されて先ほどまで話をしてきた。会話というよりも、一

方的に怒られていた感じではあったけれど。

山田先輩は学部が同じ文学部で、学部の一般教養の授業で知り合いになった。というか、向こうから話しかけてきたのが最初だった。授業とはあまり関係のないサッカーの話題で盛り上がり、その後、ご飯を一緒に食べるようになった。

京都の街は、五月の葵あおいまつり祭を約半月後に控え、どこか慌ただしい雰囲気帯びてきていた。そんな今週の火曜日のことだ。先輩と一緒に受講している講義で、レポートの課題が出た。パソコンのワープロソフトで書くこと、という形式の指定があった。

「やばい、パソコン要るのか。今持っていないのに……」

それを隣で聞いていた先輩が、

「あ、週明けまでならノーパソ、貸せるけど」

と言ってくれた。僕にとっては渡りに船だった。

「え、いいんですか？」

「いいよ。でも中にあるファイルとかはそのままにしといてくれる？ 消しさえしなけれ

ば問題ないから」

その日の夕方にノートパソコンを借りて、中にあるファイルには手をつけないうちに注意しつつ、ワードでレポートを書き木曜日の夕方に提出した。そして、そのノートパソコン

ンを先輩に返さないまま、飲み会に行った。それが金曜日、つまり昨夜のことだ。

そして今日、土曜日である。

確かに週末であれば、この部屋に人がいないのも道理だ。こういう文化部って、週末は何かない限り人はいないもんな……。

とはいえ。

とはいえたよ。

なんで、明日中までに返さないとまずいんだろう？

先輩がノートパソコンを貸してくれた時も「週明けまでならば」って言ってたよな。何かあるのかな？ 幸い、僕の週末の予定は全くないので、探す時間は沢山ある。

「うん。まずは昨日の僕の動きを追ってみよう」

* * *

「あれ？ 優吾^{ゆうご}、部活ってそこだったっけ？」

自分の足取りを追うため、部室から外に出ようとしたところで、昨日一緒に飲んでいた健也とぼったり行きあった。昨日のことを聞くために、一緒にいた連中を探そうと思っていたので、丁度^{ちやうど}よかった。

「健也、ちょっと話いい？」

「ああ、もう帰るところだからいいけど……何？」

そうして二人して、中庭に移動しベンチに座る。

土曜日の一三時過ぎ、部活などもあるので、中庭ではちよいちよいと人が通る。

「なに？ 今日飲みに行くの？」

健也は何も知らないのです、いつも通りの調子だ。普段から人懐っこいというか、軽い感じで声をかけてくるので、硬い場ではありがたい存在ではあるのだが、こういう時は逆にいらっとしてしまう。

「そうじゃないよ、大変なんだよっ」

周りの視線が一気に僕たち二人に集まる。

「な、なんだよ優吾。怖えな、びっくりするじゃないか……。みんな見てるよ」

「ご、ごめん」

「何があったんだよ……」

「ちよっとテンパってて、ごめん」

「ああ、話せよ。何だよ」

促されて今までの経緯を伝える。とはいえ、僕自身もよくわかっていないので、先輩のノートパソコンを無くしたことを、明日までに探せと言われたこと、見つからなかったら四〇万円よこせと言われたことなどを話す。

本当はもう少し慌てるべきなんだろうけど、説明となると冷静になっているのが、こんな時は便利というかなんというか。

「なにそれ？」

という健也の反応は、当然のものだろう。

「おかしいよなあ？」

と言いつつ、うなづく。

「ちよつとその金額おかしすぎるよ。弁護士？ 警察？ でもなければ、もうちよつと詳しい人に相談した方がいいよ」

健也の言うことはもつともなので、つい、うんうんと相づちを打つ。

「そうだよなあ」

でも、そう簡単に言われても。

「僕には弁護士の知り合いもないし、警察沙汰となるとなんか怖いよ。健也、誰か弁護士の知り合いとかいない？」

「あー、いないわ。ごめん、言うだけ言って」

「だよなあ」

大学一年なんてそんなもんだ。予備校の時は、大学に入りさえすれば……なんて少し夢見ていたところもあったが、入ってみれば高校や予備校の延長のようなもので、イメージ

していた大人の感じはあまりなくて……。

「先輩とか両親とか、知人とかでもないかな？」

駄目元で聞いてみる。藁わらにもすがる、というやつだ。

「部活もまだ入ってないから、そういうつてもないよ」

やっぱりか。はーっとため息をついて下を向く。

下を向いていたら、健也に聞こうとしていたことを思い出した。

「そっか……でき、健也」

「なに？」

「昨日の夜、僕どうしてた？」

重要なことだ。

「あれ？ おまえ、あの店で眠い眠いって言ってたし、終電前には帰ってたよ」

「その時、ノートパソコンは持ってた？」

ここはちゃんと聞かないと。

「でかい荷物はいつものかばんと別に持ってたから、持ってたんじゃない？」

あったのか……。

「あったのか……」

思っていた言葉と同じ言葉を、つい口に出してしまう。

「その時はあったと思うよ。店ではノートパソコン開いてネット見てたの覚えてるし」

あ、そうなのか。

「じゃ、じゃあ店で無くしたってことは」

「ないんじゃないかな。おまえが帰ったあと、忘れ物もなかったし」

納得できる。確かに店の外に出た時は、手が重かったような感じがある。

「それより、ちゃんと家に帰れたことの方がこっちには驚きだよ」

「え？」

「すつげーふらふらでさ、席から店の出口までの間でも倒れそうだったんだぜ。それでも

『だいじょうぶだいじょうぶ』って言うからそのままにしてたけど、借り物のノートパソコン

を無くすとはなあ」

完全に足に来ていたのか。

それでは、記憶がなくても仕方ないかな。

「ほかに誰か、しっかり記憶のある人はいないかな？ できれば僕がどっちに帰って行っ

たか、とか見てた人がいるといいんだけど」

予備校時代からの友人と四、五人で飲んでいたってことは覚えてる。その中の誰かに

家まで送って貰ったのだろうか？ でも、誰に？

「いや、一人だったよ。『すぐだから』って言ってたし、川口も章あきいもほほ店で寝かかって

たし。あ、川口はそのまま店で寝てたつて。章はなんか始発で帰ったとかメッセ来てた」
そうかあ。あいつらに聞いて……みても無駄か。

友人達の話では「飲み屋を深夜に出た」までしか追えないことがわかったので、話を打ち切った。

「まあ、落ち込むなよ、出てくるつて」

健也はそういうと立ち上がりざまに、肩をぼんぼんと叩き去って行った。

はあ、とまたため息一つ。

「どうしよう」

とつい独り言が出てしまう。本当にピンチだ。

やばいな……と思つてため息をついていたが、ずっとそうしていても仕方がない。気をと直して、スマホで時間を確認する。一三時一〇分。

どうするかな……。

その時、以前兄さんに言われた言葉を思い出す。

『とんでもない事態になったら訪ねてこい、ヒントくらいは与えてやれるかもしれないかな』

そうだ、兄さんを頼ってみよう。父さんに頼るのはその後でもいい。

確か兄さんの家は……。そう思いスマホで兄さんの住所を検索する。ここから一区画も

歩けば着く距離だ。

* * *

マンションのドア脇には、「手代木^{てしろぎ}」という表札が出ている。

このあたりは、商店街から少し奥に入るとすぐ住宅街になってしまふ。一軒家が多いので、一瞬迷ってしまった。

兄さんが住んでいるのは、オートロックがあるわけでもなく、かといって管理人さんがいるわけでもない、小ぶりで適度に古ぼけたマンションだった。

両隣は一軒家だし、このマンションも昔は一軒家だったのだろうか。そんなことを考えながら、エレベーターで三階に上がる。ドアの前でしばし逡巡したのち、意を決して僕はチャイムを鳴らした。そして、その後で少し後悔をした。

電話してからの方が良かったかな……。

けれど、もうチャイムも鳴らしてしまったので、「後悔先に立たず」だよな……などと思っっているとドアがゆっくりと開いた。

一〇年ぶりくらいに会う兄さんに、何と云えばよいかわからず、焦った僕は早口で挨拶を始めてしまふ。

「こんにちは、優吾です。お久しぶりです。あの……」

しどろもどろな挨拶の途中で、僕の言葉を遮るさえぎるように兄さんが一言。

「入れ」

「……は、はら」

促されるまま、部屋の中へと踏み入れる。

外は春の陽気だが、玄関の空気は少しひんやりとしていた。部屋全体が寒いわけではないが、足下が冷える気がする。エアコンの冷氣かもしれない。

どうやって説明しよう、どういうことを喋ろう……と、ここに来るまで考えていたのだが、結局あまりまとまらずにここに着いてしまった。

兄さんの後に続いて、短い廊下の先、リビングと思われる部屋に足を踏み入れる。

その部屋の光景を見て、僕は思わず息を呑んだ。

なんだ、ここ？

広さは一〇畳を少し超えるくらいだろうか。部屋の左端には大きな机があり、机の上には、モニターが沢山置かれている。

上下に二段、横に三列で六台、あとは左右に二台で、計八台。

しかもそのモニターでは、絶えずグラフのようなものが動いていたり、テレビ画面的なものが動いていたり、真つ黒な画面のものが一つもない。

こういう沢山のモニターがある場所というのを、僕は電気屋くらいしか知らなかった。モニターが多さがあまりにも異様だったので、あつげに取られてしまったが、モニター以外はキッチンとの仕切りを兼用する本棚があり、食事用のテーブルがあつてと、どうやら人の住処っぽさはあつた。学校のコンピュータールームよりは生活感がある。

久しぶりに会う兄さんは、ヒゲも剃^そっているし、部屋でもスーツを着ていたり、身だしなみはきちんとしていた。ただし、見るからに食べてなさそうな細さではあつたが。

以前、母さんが、「兄さんがちゃんと食べているか心配だ」と言っていたのはこういうことか、と改めて思った。僕の中の兄さんは、ここまで細い印象はなかったんだけど。

部屋の真ん中にはテーブルがある。そこで食べているんだろうかと思つたが、モニターを置いている机の下にゴミ箱を発見する。その中は、ゼリーの容器でいっぱいだった。もしかして、ゼリーだけ？　だとすればあの体形は納得できちゃう……。

モニターも異様だけど、壁面を埋め尽くす本棚もなかなかの存在感だ。天井は高めだけど、圧迫感がある。それから、本棚の前にホワイトボードが置かれている。それには何か数式が書いてあつて、磁石でメモがいろいろととめられている。

やっぱり生活感に乏しい。研究所とか、基地のようだ。「そうきよろきよろしてんな、何をしに来た？」

兄さんがモニターを向いて席に着き、こちらを振り向きもせず聞いてきた。

「あ、あの……。昔、僕にとんでもない事態になったら訪ねてこい、ヒントくらいは与えてやるかもって言ってくれたので」

「ヒント？」

兄さんからの返事には空気が変わるような緊張があったが、ちゃんと言わなきゃと思い、先を続ける。

「小さい頃だけど、そう言ってくれたのは兄さんくらいだったの覚えてて。それで……」

「続けて……」

「先輩からノートパソコンを借りただけど、無くしてしまって、返さないと四〇〇万よこせて言われて」

「見つけばいい」

「どこで無くしたかわからないんです」

「最初から行動を思い返せないのか」

「覚えてなくて」

「なら、金を払えばいい」

「そんなお金ないよっ」

つい、大声で返してしまう。

「ご、ごめんささ」

すぐに謝ったけど、兄さんは目を細めた。

「出て行け。もう少し冷静になったほうがいい。二時間くらいしたらまた来い。出口はさつき来たところだ。戻れ」

モニターには、青い文字と青いグラフが表示されていた。数字の羅列が多くてよくわからないが、その青色が印象的で記憶に残った。

* * *

兄さんに言われた通りに、マンションを出た。

先ほど兄さんは「二時間くらいしたらまた来い」と言っていた。頭を冷やそうと、とぼとぼと大通りに出て、喫茶店を探す。すぐに、少し年季の入った小さな喫茶店が見つかった。

「ブレンドください」

とりあえず珈琲コーヒーを頼む。

「あいよ……」

時間もあるし一旦整理をしよう。メモを取り出し、僕の今までの状況を書き出していく。まず、借り物のパソコンを無くしたのは事実。だからこれは自分のミスだ。なんとかして挽回ばんかひしないといけない。では、どこで無くしたかをはっきりさせないといけないのだけど、残念ながら全く覚えがない。

健也に聞いた結果から考えて、店を出る時は持っていたのは確かだろう。

ということは、店から家までの移動の間。でも、その間はまったく記憶がないし、財布からお金もなくなっていたので、ありとあらゆる移動手段が考えられる。

地下鉄、タクシー、徒歩……。バスは時間的に動いていないから、排除していいかな。

地下鉄やタクシーならば、乗った時間がわかればなんとかなりそうだけど、あいにく記憶がない。

……などとメモにがりがりとして書いて居ると、目の前に珈琲と伝票が置かれていた。

砂糖を一匙ひとさじだけ入れ、ゆっくりと啜すする。

美味しい。

こんな時でも、味覚は素直に僕に伝えてくれる。

少しホツとしたのだけど、ポケットのスマホが震えて着信を告げる。取り出して確認すると、画面には「山田」の文字。

「先輩から？」

パソコンを借り、今まさに返さなければならぬ相手からなので丁重に出る。

「もしもし、菊宮です」

「あ、俺だ山田だけど、パソコン出てきた？」

先輩の声はかなりいらだってる感じがして、ちょっと恐い。

「今探してます」

怒られるかと思ったが、先輩の反応は予想とはちよつと違っていた。

「そうか。いや、ほんとにまずいで金よりもまず探してくれ。で、出てこなかったら四〇〇万とかさつきは言ったけど、三〇〇万でも、二〇〇万でもいいからな。出せる分だけ出してくれ」

なんだか、昼に会った時とは調子が変わっていて、違和感を少し感じた。

「は、はあ」

曖昧あいまいな返事になってしまう。

「頼む。あ、電話切るけどまた連絡するから」

はあ。

ため息も出るよ。どうしよう……。

「兄ちゃん、大丈夫か？ 具合、悪いのか？」

何分くらい経つたらう。ぼんやりしていると、店のおじさんに声をかけられる。

「あ、大丈夫です。平気です」

「そうか。無理してんじやないぞ、なんだったら奥で休むか？」

「平気です。ありがとうございます」

こういうお店もあるんだなあ。思わず、立ち上がってお辞儀をしながらお礼を言う。

再び腰を下ろす際、店のテレビがずっと点きっぱなしだったことに気がついた。

中国と日本が組んで新薬研究をやっている……というような番組が流れている。中国といえはマイナスな報道が多かったので、妙に印象に残った。

そのまましばらくテレビを観ていると、兄さんからメッセージが届いた。

「そろそろ来てもいいぞ」

時計を見ると、一五時ちよつと過ぎになっていた。

* * *

「入れ」

「おじゃまします」

再び、先ほどのリビングに通される。モニターにはグラフがたくさん表示されているが、青ではなく赤い文字が多くなっていた。点いていない真っ黒な画面も多い。

「さっきは青い画面だったのに、今は赤い画面なんですわね……」

「ああ、先ほどは空売り中だったんでな。株は青が下がってる最中、赤が上がってる最中を表す。この表示は違ふところもあるが、うちの設定ではそうしている。先ほどは、ちょうどいい感じで値下がりにしてくれていた会社があったから、少し使わせてもらった。数日分ほどの金額にはなったので、少しは優吾にも付き合える」

「あ、ありがとうございます」

「座って」

促され、大きいテーブルの前にある椅子に腰掛ける。

兄さんは兄さんで、少しだけ離れたところに座った。

「よくわからないことになっちゃって、兄さんが前に『とんでもない事態になったら訪ねてこい、ヒントくらいは与えてやれるかも』って言ってくれたんで頼りに来ました」

「頼りに来ました、か。ふむ。いいよ」

「えっ」

「頼ってくれても構わないよ」

こういう時兄さんは自信たっぷりだ。そんなところは昔と全然変わらない。

「それで、さっきはトレースしたか……と聞いたが、どうだ？　したか？　物を無くしたんだらう？」

先ほど、喫茶店で書いたメモを渡した。

「昨日の夜の出来事なんだけど、全然覚えてなくて……。友人から聞いた最後の行動まではメモに書いてみたんだけど、それ以降わからないんだ」

「ふむ」

あごに手を当てこちらをじっと見つ、足を組んでいる。物事を考えている時の兄さん

の癖だ。この辺りは全然変わらないなあ。

「スマホ、持ってる？」

「は、はい」

使ってるスマホを差し出す。

「ふーん、スライドのキーナンバーは？」

「あ、あけます」

「ちよっと設定いじるよ。あとで戻しておいて」

「はい。どうぞ」

椅子の上で身を縮こまらせて、兄さんの一挙手一投足を見る。

こういう風に兄さんのことを見るのも、一緒に住んでいた時以来かもしれない。

兄さんの指がスマホの画面を移動している。何か操作してるんだろうとは思うものの、ここからだとはよくわからない。

「ああ、そんなに不安にならないでくれ。設定を解除したのと、ログがどれだけあったのかを確認してはいたってだけなんだ。で、ちよっと質問いいか？」

「はい」

「このスマホは電源が入ってから結構経つけど、充電してから切れるまで普段どれくらい？」

「二日くらいかな？」

「二日!？」

へー、と小さく言ったところを見ると、少し驚いたらしい。

「そうか、二日か。だとすると昨日の夜は、このスマホは電源入れっぱなし？」

「はい」

「へー、そうか。ちよつとPCと繋がせてもらおうよ」

そう言うのと、モニターの前に移動し、スマホをケーブルと接続する。

「アプリを入れたり消したりする訳じゃない。ただちよつとデータをパソコンに吸い出してからの方が整理がしやすいと思ってね」

モニターの一つがスマホの接続用画面に変わり、データのダウンロードを始めた。

ダウンロードは数分で終わり、スマホは僕の手元へと戻って来た。

「簡単なトレースをしよう。さきほど、『行動のトレースはしてみた』と言っていたよな。多分、優吾の『記憶』でのトレースはできたのだと思う。だけど、もう少し『行動』でのトレースをしてみれば、また別の『記憶』が出てくるかもしれない」

そう言うのと、兄さんはモニターに地図と無数の点を表示させた。

「簡単にプロットしてみたけど、現実と合わせるには優吾の協力が必要だ。少し質問をしていくので、それで補完していいか」

兄さんがキーボードをタイプしていくと、画面に「20:13」といった時間らしい文字列が、並び始める。

「この点が移動した場所、上の時間が移動していた時間」

きちんと大学構内を一九時くらいまでうろうろしていたのがわかるし、二三時くらいまで健也と一緒にいたであろう店の位置を点が示している。

「二三時くらいまでは『記憶』と『行動』が一致している。問題はその後だ」

そう言うと、二三時までの地点は消え、地図上には二三時以降の地点が現れる。

「なんか、まばらになってますね……」

さきほどまでとは違い、地点同士の間隔が広い。

「速度が速いんだ」

速度？

「優吾の持つてるスマホは、GPSを一定時間で記録するタイプだったので、それをダウンロードして表示させている。一定時間で記録することは、移動が速ければ遠いところに次のポイントが記録される。だから、速度が速ければ速いほど点と点の間が広がる」

ああ、そうか。速いってことなのか……。ってこれは……。

「歩行速度じゃないですね」

「うん、そうだね」

「自転車とか？」

「違うね」

そこは即答された。

「GPSを綺麗に拾っていて、道以外のところを通っている。これは地下鉄だ」

「え」

乗ってたのか、僕……。

兄さんはモニターに出ている地図の画面を拡大しつつ、説明をし始める。

「点を注目して見て欲しいんだが、点と点の間が広いところと、点が「とどまつてる」ところがあるだろう？ これは駅にいることを指してるからね」

駅……。ああ、電車なら駅には停まるか。

「で、これで見ると、優吾はきちんと最寄り駅まで電車で帰ってるように見えるけど……」

と言ったところで手をあげにやり、考えているポーズになる。

「優吾……」

「はら」

「優吾、移動中に君は寝てた？」

「え？」

「なんとなくだけど……」

「いや、全然覚えてないんですよ……」

ほんとうに覚えていないのでなんのことやら。

「ふうん……」

と言ったつきり、兄さんは画面をじいっと見て、少し動きが止まるが、またキーボードを叩き始めた。

「時間からするとありそうなものだが……」

キーボードの音が激しくなる。

その時、不意に周りの空気が変わった気がした。何かが変わったとしか感じられなかった。そうなったと思ったら声が聞えた。

「おかしいな。この時刻表ではこの時間走ってないな」

「ええ？」

思わず声をあげる。

「だって地下鉄、電車に乗ってるんでしょ、僕」

僕のことなのに何か変な感じだけど、なんでだか反発していた。

「その時間には走ってない、時刻表的には」

そう言うと、キーボードの手を止め首を傾げる。

「他に何かあるはずなんだ。何か」

傾げた首が、僕の方を向く。

「優吾、もしかして今は電車の運転手か？」

「へ？」

裏返った声が思わず出る。

「なんで？」と聞き直すと、兄さんは椅子を回転させて、身体ごとこちらに向き直る。

「時刻表に近い時間、数分ならよく遅れはするんだが、このGPSでの時間を見ると駅から駅に、一時間以上遅い時間に移動している。それだと普通、乗客は乗っていない。そういうことを考えると、運転手というのはいくらもある」

「違いますよ」

「ほう。ではなんだ？ 確か記憶だと二〇歳になったかどうか、という時期だったはず」

さすが、兄さんの記憶力。

「普通に大学生ですよ」

「普通に？ 二回生か？」

「一回生です。一年浪人しました」

「そうか一回落ちたのか。ふむ、で二〇歳になっていたので、酒が飲める。そして酔っぱらって前後不覚になった、か。」

いやあのその……まあ、事実なんで文句もないけど。

「で、その大学生が『動いていない時間の電車』に、乗ってなぜ動いている？」
聞かれるも答えられない。

「そうか、記憶にないと言っていたな。そうか、うん。ふむ」

椅子がぐるんと回る。

「ちよっと、記憶の最後を再現してもらっていいかな？」

「再現？」

「うん。友達と店に入った。きつと何か注文した？ 若いから、『とりあえずビール』とか

『とりあえずチューハイ』とかだろう。そういうのを順番にしゃべってくれ」

「ええ？ そんな順序立ててなんてできませんよ」

むりむり。できないですよ。

「普段飲み屋に行くと、優吾が注文をするか？」

「します」

「ではメニューを見て頼むか？ それとももう決まってるのがあるか？」

「決まっていますね。まずはレモンサワーと枝豆で」

「ふむ。次は」

「メニューを見てから決めます」

「その日はどうだった？ 友人は？」

「健也がいました」

「一人だけか？」

「最初は健也だけで、後から予備校時代の友人が三、四人来て」

「遅れたのか。何か言っていなかったか？」

「児島が『駅こじまのホームでいつまで待っても電車来なくてさー、事故かなんかだったんかなー』って言って、健也が『だったら先にメッセでも入れろよ』ってやりとりして……」

ばん。

兄さんが自分の顔の前で、手を叩いた。

何かを発見した時の兄さんの癖、というのがわかるのはもうちょっと後のことで、この時は、すぐく澄んだ音が部屋に響いたのをよく覚えている。

「それだ」

兄さんはそう言うと、くるっとまた画面の方へと身体を向けてしまった。

そのままキーボードを叩き、画面には検索画面が表示される。

「こういうことかな？」

画面には、SNSの発言が表示されていた。

「当日の深夜、地下鉄烏丸線は事故があり三〇分遅れの運行だった。公式サイトにはそういった告知が出ないから、わからないのも無理はない。ユーザーの発言から『遅れてる』

とか『最終も少し遅くなってセーフ』などの意見も見える」

今度は時刻表と、マップを表示する。

「時刻表で最終一つ前となっているこの電車を三〇分ほど遅らせると、優吾の乗った電車と合うな。ということはこの電車に乗った、というのがもつとも可能姓が高くなる」

「でもノートパソコンも持って降りてなかったし、お金もなくなってたんです」

「金はわからんが、ノートパソコンは忘れたんじゃないか？ 電車に」

「へっ？」

なんですって？

「酔った人間というのは、手元のことは見えてるので気にかけるが、もし網棚の上に載せていたり、脇に置いていたりした場合、忘れてるといふのを見たことがある」

見たことが、ですか……。兄さん自分じゃやらなさそうだな。

「優吾、ちょっとお使い行ってきて」

「あ、はい。どこにでしょう？」

「竹田駅。構内に忘れ物を保管してるところあるから」

「えと、なんで？」

兄さんは、僕の言葉は意に介さず、そのまま指示を続ける。

「また駅に着いたら電話して。番号はさっきかけてたからわかるよな。あ、これも持って

行っておいて」

そう言われてモノを押し付けられ、玄関に出された。

えと……。

* * *

兄さんの指示から考えると、先輩から借りたノートパソコンは忘れ物を保管している竹田駅にあるってことだろうか。

今出川駅いまでがわまで歩いて行って、いつもと反対方向に向かう電車に乗る。入ったドアと反対側のドアのそばに立ち、体重を委ねる。席はちよいちよい空いてはいるんだけど、寝てしまうのが怖く、少し防御的になっている。こんな時に寝るなんて流石にないと思うけど、自分で自分が信じられない状態になっている。

さすがに四条しじょうから京都きょうとくらいまでは混んでいたが、九条くじょうを過ぎた辺りからかなりの余裕が出てくる。

人、こんなに減るんだなあ……。

そんなことを考えていると、兄さんからメッセージが届く。

『竹田着いたら電話して』

程なく竹田駅に到着し、改札を出たところで兄さんに電話をかける。

「あ、兄さん？ 優吾です」

「そろそろ着くと思ってた。北改札に出たか？」

「あ、はい。大きいほうに出ました」

「出て右側に駅務室があるから、そこに行って昨日落とし物をしました、って言って」

「はら」

右手を見ると、言われた通り切符売り場の奥に駅務室があった。

「すみませんー。昨日落とし物をしたんですが……」

他の業務をやっていたと思われる駅員さんと目が合う。

「はい、何時ごろでどういふもの落としましたかわかりますか？」

「ノートパソコンなんですが」

「ノートパソコン？ ああ、アレかな？ ちょっと待って……」

そう言うのと奥に引っ込んで行き、少しするとノートパソコンを手に戻ってきた。

「これででしょうか？ ちょっと型番確認お願いします」

先輩から借りたノートパソコンに似ているけど、細かいところはよくわからないんだよな。カバーのところに最近人気のアイドルグループのステッカーが貼ってあったり、学校の校章のステッカーが貼ってあったりする。この辺も記憶と結構似てる。

開けたり、電源を入れたりしていると、またメッセージが届く。

『PCがあつたら、渡したものをUSBポートに差して』

なんだかよくわからないけど、渡されたものをUSBポートに差してまた中を見ると、僕の作成したレポートのファイルがあつた。

「これです。僕のです」

正確には『僕が借りた先輩のノートパソコンです』なんだけどね。

「そうですか、ではここに名前と住所を……。あ、身分証明書ありますか？」

「はら」

「ちよつとコピー取らせてもらいます。学生証ですね、『菊宮優吾』さん。お借りします」
「どうぞ」

起動して中を確かめっていると、駅員さんが戻つて来た。

「身分証をお返しします。モノは問題ないですね？ ではどうぞお持ち帰りください」

「あ、ありがとうございます」

そう言うのとノートパソコンを閉じ、丁寧に礼をして、駅務室を出た。

改札を通ろうとしたところで、また兄さんからメッセージ。

『あつただろ？ そうしたら戻ってこい』

言われなくてもそうします……というか、タイミングばっちりなんですけど、どっかで見えます？

電車は始発なので悠々座れはするのだが、行きと同じように入り口と反対側のドアと座席の間に寄りかかる。

電車が出発し、いろいろと考え始める。

兄さんは、なんで時刻表とずれたってだけで僕が竹田駅に忘れ物をしたってわかったの
だろう？ そもそも、なんでノートパソコンは出てきたの？

先輩はこんなノートパソコン一つで、なんで三〇〇万とか四〇〇万とか法外な金額を言
ってきたんだろう？

そんなことをちらちらと思いながら、腕を組んで目をつぶったり考え込んだりしていた。
そうしてらうちに、今出川駅に到着した。

* * *

玄関のチャイムを鳴らすと、数秒遅れで兄さんの声が聞える。

『優吾か？ 帰ったな、入れ』

あれ？ なんか言葉に違和感が……。

最初は「入れ」だったし、つぎも「入れ」だったし……。ああ、ちゃんと僕の名前を呼
んでくれるようになったのか。

それだけのことで、なんだか気分が少し上向いた。

「お邪魔します」

パソコンをテーブルに置く。

「あ、差しっぱなしだった……」

置いてから気づいたが、USBポートには兄さんから渡されたものが差さったままになっていた。

「ちよっとそのまま持ってきて、こっちに」

相変わらず兄さんはモニターを見たま振り向きもせずに、手だけこっちに伸ばした。

「持って来て」

「はら」

パソコンを兄さんに渡す。僕のじゃないんだけどね。

兄さんはパソコンを受け取ると、蓋のところのステッカーを見てつぶやく。

「ああ、これならいいね」

何が『いい』んだろう？

兄さんは、机の上をがさごそ引っかき回している。

「兄さん、何してるの？」

「いや、汚れが気になってね。同じステッカーがあったから貼っところと思って」

確かに、新しいステッカーを貼って綺麗になっていた。前にちょっと目立っていた、アイドルグループの大きいステッカー。なんで兄さんが持っているのかは聞かないでおこう……。「さて」

兄さんは僕から取り上げたノートパソコンの蓋を開け、中を見始めた。

「電源は……ああ、汎用はんようのでいけるか。これならあるな」

「ごそごと足下に手を入れ、ケーブルを取りだしてノートパソコンに差す。」

「優吾、ちょっとこれからやることは、先輩には黙っててくれないか？」

「え？」

「少し気になってね。いや、それほど悪いことじゃあない」

「は？」

「軽い犯罪なだけだ。黙っててな」

ええええ。はんざい？

「えと、ちょっと犯罪って、その……え？」

少しパニックになり言葉がまとまらない。犯罪だめ絶対。

兄さんは手をとめず、こちらを振り向きもせず続けて言う。

「このノートパソコンを返せなければ四〇〇万よこせ、って言うからには、どれほどの『中身』が入ってるんだろう、っていう興味だね。せつかく手元にあるから調べたいじゃないか」

「調べるって」

「大丈夫。データは壊さないし、見たなんて足跡を残すほど馬鹿じゃあない。優吾がこのことを先輩に黙っていてくれさえいいだけだ」

「えと」

でも、犯罪は……。ともごもごしている、

「ヒントを与えたのは誰だ？ 出来るよな？」

そうまで言われたら何も言えない。不承不承ふしょうぶしょう承知をすると、こちらにむけて親指を上
に立てたポーズで「good」の合図を送る。

見ない見ない。見なければ知らない。

顔を伏せると、スマホが着信のライトを点灯していた。

「あ、着信」

山田先輩からだった。

「あの、兄さん、先輩から着信が来てるんですが」

「あと三〇分くれ。そうだな、六時。六時になったらこっちからかけてやれ。それまで電
話には出るな」

現在の時刻は一七時二二分。

「優吾、返事は？」

「はい、わかりました」

何かノートパソコンで作業している音はするも、ここは見ない方針で。

* * *

とはいえ、三〇分近くも何もしないのは暇だな……。

それと、お腹も空いたし……。

「兄さん、あの、お腹空いたので何かご飯とか買ってきていいですか？」

恐る恐るそう言うと、

「ああ、台所は右手の奥、本棚の向こうにあるから勝手に使っていい。レンジとコンロがある。ヤカンくらいならあつたはず。あとはわからんから適当に使って良い」

ああそれは『どうとでも好きにしている』ってことですね。兄さん。

「ありがとうございます、使わせて貰います」

そうお礼を言って、台所へと向かう。

途中本だらけなので、足の踏み場を確保すべく、どかしてタワ―にして積んでを繰り返しつつ進む。

部屋の片づけって誰もしてないのかな？

そうして、ようやく台所にたどり着く。

「うっ」

これはなかなかの荒れ具合だ……。

ちよっとこれは掃除しないとやっつけられない、けど、正直僕も掃除は得意ではない。だ
けどとにかく、ゴミをまとめて袋に入れて、水洗いできるものは水洗いする。

こりゃ、ここでご飯を食べられるのは、夜遅くなるなあ。買いに行こうかな。そう思
って、時計を見ると一八時ちよっと前。

おっと、まずいかな。

水道を止め、奥からテーブルのある方へ戻る。

「優吾、そろそろ終わるから。その借りた先輩をここへ呼んで」

へ？　ここへ？

「大人が立ち会いにいた方が何かといいだろう？　何かと」

それは、一人よりはいいけど。

「ここに呼んで大丈夫？」

「いいよ、呼んで。もういろいろと終わったから、返せるよ」

いろいろ？

なんか引つ掛かりもあるけど、先輩に連絡を取るのが先だ。

かけなおすと、呼び出し音が二回なるかならないかで、すぐに電話が繋がる。

「あ、先輩ですか、菊宮です」

「おお、どうだった？ 見つかりそうか？ 駄目ならちゃんと金を頼むな」

「実は、ノートパソコンなんですが、見つかりました」

「なに？」

大きな声だったので少し受話器を遠ざけてしまった。

「そうか、良かった。モノは？ モノは無事か？」

モノ？ ノートパソコンじゃないのかな？

「それですね。ノートパソコンを返したいのですが、今から言う場所に来てもらってもいいですか？」

「場所？ どこだ。行くよ」

普通なら『持ってこい』とか言われてもおかしくないような状況なのに、即答だ。

「場所はですね、今出川と出町柳でまろななの間くらいです。先輩は今どこですか？」

「ああ、家。だから北山だよ」

北山……と言えば今出川から三駅。一〇分弱で駅には着く。

「じゃあ、今出川着いたら連絡ください」

「ああ、わかった。すぐ行くわ」

そう言うのと電話は切れた。

「これでいいの？ 兄さん」

不安だけど、兄さんがそうしろと言ったので、ここは従う。何も考えなしでそういうことをする人ではなかったと、記憶も勘もそう告げている。

「そうだな。その先輩が来たら、優吾は何も喋らないでここまで通してくれないか？」

「何も言わないで？」

「ああ。いいか、何も言うなよ。絶対に彼は焦ってここまで来るから」

電話口でも少し焦りは感じたけど、全然相手の会話が聞えてなかったはずの兄さんが、なんでわかるんだろう？

それから少しすると先輩から電話が来たので、ここまでの道筋を教える。

五分もかからずにドアのチャイムが鳴った。大分急いだんだろう。

無言で部屋へと通し、先輩をさきほどまで僕が座っていた席へと案内して、僕は兄さんのそばへと移動する。

* * *

「キミが山田くんか」

兄さんが椅子を回し、先輩に向き直る。

「このノートパソコンを返せなかったら四〇〇万円か。かなり吹っ掛けたね」

「いや、三〇〇万でも、二〇〇万でもいいんだ」

「ふうん……。根拠は？」

「え？」

「三〇〇万や四〇〇万では足りないと思うんだけどね。高飛びには」

たかとび？ 高飛びって、なんだっけ？ 棒高跳び……は陸上競技だし？

首をひねっていると、兄さんが「あとで種明かしはしてやるから黙ってる」とささやく。

「や、アジアの方だったら……」

「東南アジア？ 止めときなよ。あいつらはあの辺も詳しいぞ。行くならEUだよ、欧州」

「その辺りは、金が足りなくて……」

「まあそうだろうね。で、どうするの？ 出てきたノートパソコン。これを持ってあいつ

らのところに行くの？」

そう言われた先輩は、こっちを見て不思議そうな顔をしてから、兄さんの方へ向き直る。

「ど、どこまで知ってる？ まさかそれのもとの会社の人か？」

もとの会社？ それって？

「違うよ。単にこの話はアドバイスだよ」

そう言って兄さんは立ち上がり、先輩の前のテーブルに、ノートパソコンを置いた。

「これが要るんだろ？ 持って帰りなよ。で、優吾。ああ、菊宮くんへの請求はなしにし

てほしいな」

「中身が無事ならな」

そう言うとき先輩はノートパソコンを起動させて、キーボードを叩き、中を見始める。五分近く作業をした後、先輩が大きく息を吐く音があたりに響く。

「問題ない」

「そう。良かった。なるべく関わらない方が良いと思うよ」

ここにこした兄さんが先輩に向けて言うとき、先輩の顔色が青くなっていく。

「あんた、どこまで……」

「おっと」

先輩が喋ろうとするのを兄さんが遮る。

「きちんと『前と同じ状態で返した』し、優吾の使ったファイルも『そのまま』だっただけろ？ 何も触ってないからね」

「触ったのか!？」

先輩の大声が響く、が。

「何も触ってない、と言ったろう?」

「そうか」

そう言うとき先輩はノートパソコンを大事そうに抱えて、立ち上がる。

「世話になった。ありがとうな、菊宮」

喋るなど言われてはいるけど、お礼を言われたので思わずそれを返す。

「こちらこそ、借りておきながら途中無くしてしまつて申し訳ありませんでした」

僕はそのまま深々とお辞儀をした。先輩は、下げた僕の頭に手をとん、と置いた。叩いたという感じでも通用するくらいの勢いだった。

身体を元に戻すと、ドアを出る先輩の姿が見えた。

なんとなく、もう会えない気がした。

* * *

先輩が帰ると、あたりはすっかり暗くなっていた。

「優吾、さっきの種明かしをしてやろうと思うんだが、腹減らない？」

「そういえばさっき、台所を掃除していたんだつた。」

「減りました」

「そうか、じゃあ何か作れる？」

「へ？ 作れますけど」

「外で食べるのはちょっと厭いやなので、なんか作ってくれない？ 小学生の頃とか作ってくれたじゃない？」

相変わらずよく覚えてるなあ。

「材料、何もないんですけど？」

そう言うのと、兄さんから財布が投げられる。

「それでなんか買ってきて。野菜だらけじゃなければいいや。あ、違うな。今日は魚。魚が食いたい。魚の焼いたのか煮たの」

「煮たのは直ぐは食べられませんよ。時間かかるし」

「じゃあ焼いたのでもいいから」

時計を見ると二〇時前。商店街、ぎりぎりやってるかな。

「じゃあちよつと、買い出しに行ってください」

そう言うのと、近所の商店街へと向かった。

商店街で急いで食材を買い込み、マンションに戻る。

焼き魚ということだったので、シヤケの切り身を買ってきた。

幸い、台所にフライパンはあったので、その上に百円ショップで買ってきた網を載せる。その上にシヤケを並べ、岩塩を振って塩焼きにする。商店街にいったらちようどモンゴルのピンク塩というのが売っていたので、使いたくなって買ったのだ。

でも、それだけじゃなんか足りないよなってことで、お麩ふとワカメのみそ汁を作る。

兄さんは野菜だらけじゃなければ、とは言っていたが、僕はサラダが欲しかったので、レタスとワカメで簡単なサラダを作る。ドレッシングがなかったので、お酢と醤油をベースにして作った。この辺は目分量だ。

米もなかったので、二キロほど買ってきた。でも炊飯器がどこにも見当たらない。兄さんに聞いたところ『どこかに埋まってる』とのことだけど、見つからなかったので脇にあった鍋で炊く。

ちょっと鬨った感じではあったけど、なんとかできたので一度テーブルに戻って片づけ、その上にこれも先ほど買ってきた広めの布を敷く。テーブルクロス代わりだ。

シヤケとみそ汁、サラダとご飯を二人分。

「兄さんできたよ」

そう僕が声をかけると、兄さんはすごい勢いで椅子から立ち上がった。

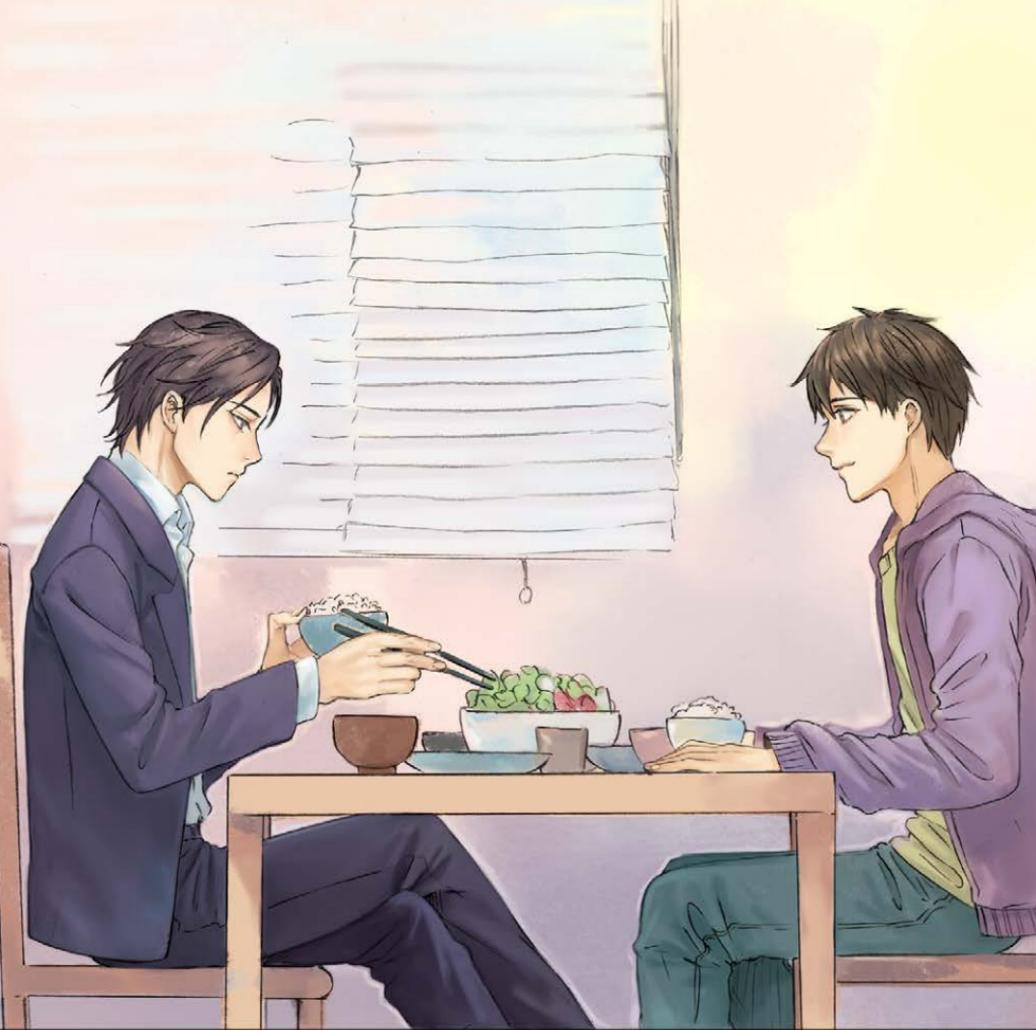
「すごい。人間の食事だ」

ちよと兄さん、その言い方は……。

「兄さん、今まで何食べてたんです？」

「ゼリーかバランス食料。もしくはカップ麺か豆乳」

あー、なるほど。



「とにかく、食べましょう。いただきます」

そのまま箸を持って食べようとする兄さん。

「いただきます。は、言いました」

「……いただきます」

よろしい。

そうして、久しぶりに兄さんと一緒にご飯を食べた。

* * *

兄さん曰く『人間の食事』を終えて片づけると、いよいよ種明かしの時間だ。

「準備できましたので、解説をお願いします」

「いいよ、まず、何からいこうか？」

せっかくなので、順番に聞きたいことを聞いてみることにする。

「えと、まずはなんで竹田駅にモノがあるとわかったの？」

「電車内の忘れ物はあの路線は竹田駅に保管されるから」

即答。

「なんで電車内の忘れ物、ってわかったの？」

「起きた時になかった、とおまえは言った」

「はら」

「そして、気がついた時はなかった、とも言っていた」

「はら」

「だとすれば移動中の気の抜けた時、席に座って寝ていた時に無くすというのが一番確率が高く、飲んでいたという店からの継続データのGPSを見ると、電車内で寝ていた、と判断するのが適当だと思ったから」

え、それで？

「じゃあ竹田駅になかったら？」

「お手上げだった。あとは警察かな、とも思ってた」

「確信はなかったの？」

「確信はあった。あつたけど……優吾、おまえという存在が記憶と違って成長してたら駄目だったな」

え？

「小さい頃の優吾は起きている時、モノをどこかにやらなかった。眠くなって手を離れたものはよく無くしていた。そういう記憶からの逆算だよ。だから『優吾』だったからできた、プロファイリングだよ」

はあ、昔から僕は変わってなかったから、つてことか……。

「さて、次は？」

「えっと、そもそもなんでノートパソコンは出てきたの？」

「ああ、それは簡単だ。ノートパソコンっていうのは、実は売りにくい。売りにくいってのは売る場所が限られてるんだ。中古屋も最近は盗品チェックが厳しいので、拾っただけじゃ売れにくくなってからね。で、そういう場合普通はオークションが使われる。なのでオークションを検索したんだが、まだ出てなかった。だから『まだどこかに保管されてる』って思ったんだ」

「それだけ？」

「出てきたら？」

まあそんならだけ。

「オークションにあつたら？」

「落とそうとして、落としたら連絡したね。『そればくのですが盗品じゃないんですか？』
って」

「そんなのでできるの？」

「まあ、やり方はあるんだよ」

その時になつたらまた聞こう……。今はよくわからない。

「じゃ、次」

「先輩はこんなパソコン一つで、なんで三〇〇万とか四〇〇万とか、法外な金額を言ったの？」

「ああ、それは中身を見たからわかる」

「中身見られたんだ、あんな短時間で」

「見られるさ。単純な暗号キーだったからね」

「なんだったの？」

暗号がどうかより、そっちが気になる。

「アジア、中国の製薬会社のファイルだよ」

「せいやくがいしゃ」

「うん、化学記号だらけだった。正直その辺は専門外なので深くはわからないけど、なにかの研究用ファイル。新製品か、今普通に売ってるものかはわからないけどね」

「じゃあそれ、なんで僕が借りられたんだらう？」

「うん、不思議だよ。そこが不思議なんだ。これは想像に過ぎないのだけど、足取りを混乱させるために、全く関係のない人間に使って貰った、とかじゃないかな？ 優吾、使ってる時にあやしい奴とか見てない？」

「いや、なんにも」

「そうか、じゃあ何だらうね……。それはさておき最初の質問だけど、そういうファイル

を持ってその先輩はどこか別の国……ああ、違うな、『中国のファイルを持っていたという過去があったので』逃げないといけないかった、ってことかな」

「持っていたから？ 持っている、ではなくて」

「そう。そうすれば眼、というか追っ手は分散されるからね。ノートパソコンのファイルを追う人と、その『持っていた人』を追う人に」

「それで、アジアとかEUとか……」

「その辺にしてもあてずっぽうだよ。そんなスパイ物みたいなことが普通に起きるとは限らないし。そういう状態なのかカマをかけてみた、というだけだな」

「カマですか」

「うん、外れても『なに言ってるの？』って言われるようなカマかけ」

「それで何かわかったの？」

「まあその先輩が『脅えてて、逃げようとしていた』ってのはわかったけど」

「けど」

「うん、それ以上はわからん。お手上げ、降参」

えー。

「ちよっとかっこつけてみたけどね。ここまでだよ」

そういうと兄さんは肩をすくめてみせた。

「それで、他には？」

「他は……うーん。どうやって僕の足取りを知ったのか、とかなんで時間正確にメッセー
ジが来たのか？ とか知りたくもあるけど多分GPS？ とかいうのなんでしょ」

「そうだね。大体その優吾の持ってるスマホ関連のを使つてればGPSデータは取れる、
それで、そこで推測できるからね」

「持ってると全部？」

「大体記録される」

まじまじとスマホを見る。そんなことできるのか……。少し恐いかもしれないな。
でも今回はこれのおかげで助かったので、そういう恐さも使い方なんだろうなあ。

「あと、なんで財布からお札がなくなつてたんだろう？」

兄さんはちょっとだけ困つた顔をしてこういった。

「誰かにくれてやつたんだろ？ 優吾のことだから」

「そうなのかな？」

「さすがにお金にはGPSが付いてないから、探知は無理だぞ」

「だよね……」

「あ、あとそうだ」

「何？」

「持って帰ってくる時にノートパソコンのUSBポートに差したのって、何？」

「ああ、あれはBLEのセンサーだよ」

「BLE？」

「うん。あの中にセンサーが入ってて、近くにタイマーなんかがあると、反応するようになり出てるんだ。さすがにタイマーの種類まではわからないけど『ありそう』っていうあたりはつけられるんだ。脅されてたから、ノートパソコンの中に変なタイマーが入っていて、爆弾や麻薬の運びをやらせようとしたのかな？ って思ったんでな」

「そんなことわかるんだ……」

爆弾？ 麻薬？ そういうことは全く想像もしていなかった。

「いや、最初三〇〇万とか四〇〇万とか言ってたんで、すぐ『ああ、取引用のノートパソコンかな』って思ったんだよ。念のため、だよ」

「え、と。じゃあ爆弾とか麻薬とか、ノートパソコンに入ってた場合は？」

「うん、メッセージですぐ『はい、警察に行つてね』って言おうとしてた」

と言うと少し笑って、こうも言う。

「あのままだったら、何も関係ありませんって言えたからね」

ひどい。けど、こういう酷^{ひど}さは小さい頃から変わってない。恐いことをやらせて自分は結果を聞いて判断する。そういう人なんだよな、兄さんは。

「変わってないなあ」

そう言うのと、兄さんはちよと表情を曇らせながら、

「……結構変わったよ」

と静かに言った。

* * *

「そろそろ遅いけど、家には連絡入れたか？ 遅くなるにしても、うちに來てることくらい言っといた方が良くないか？」

兄さんからそう言われ時計を見ると、もう夜の十一時を回っていた。

ひとしきり兄さんから聞いた後は、本棚で面白そうな本を片っ端からもってきて、テーブルの上でずーっと読んでいた。そうこうしていたら、すっかり時間が経っていた。

その間、兄さんはまたモニターに向かってなにかしていた。何をしていたかは、聞かなかったのでよくわからなかったけど。

「兄さん」

頃合いと見て、さつき台所で掃除してた時から考えていたことを、実際に声に出す。

「ん？」

「僕、ここに住んじゃ駄目かな？」

「住む？　なんで？」

「いや、家より学校近いし。ほら、あと僕料理できるよ」

「んんん？」

悩む兄さん。まあそりゃ、突然言われちゃ困るよなあ。

「役立たずだけど、買い物とか行くし」

「いや、役立たずじゃあないよ、優吾は」

そういうと、おもむろに電話をかけた。

「あ、おじさん。そう、譲^{ゆずる}。久しぶり。うん、まあ元氣。大丈夫、金もなんとか稼いでる。

心配しないでください。うん、そう。で、優吾がこっちきたんだけど、あいつしばらくこ

っちで面倒みさせて貰えない？　うん、大学入ったって言ってたから。こっちの方が近い

し。ああ、大丈夫、そういうことはないよ。うん。じゃ替わる」

そういうと受話器を僕に向ける。

「話せよ」

小さく兄さんに促され受話器を取る。

「あ、父さん。うん、僕、優吾。うん、そう。兄さんのところで……。うん。わかった。

迷惑かけないようにする。……。あ、母さん。うん、なので後で服とか取りに行く。

うん。よろしく」

そういつて受話器を兄さんに返す。

「おばさん、お久しぶりです。はい。そうです。はい。大丈夫です。しっかりしてますから。また今度挨拶も行きます。はい。じゃあ、それでは。おやすみなさい。……と、いうことで。優吾、それじゃ左手の奥の部屋使え。ダンボールだらけだけどかせば寝られると思う。まったく触ってない部屋だから、優吾の好きに使え」

えと、はあ。

ちよと戸惑っていると、すぐ、

「布団とかはないから、今日は適当にエアコンで調整して寝な」

「はい、なんとかかします」

「優吾」

「はら」

「これから、よろしく」

「はら」

こうして、兄・手代木譲と、僕・菊宮優吾の奇妙な共同生活が始まった。

次回〈試し読み第二回〉更新日は**8月25日**です。

[『手のひらの露』作品ページはこちら](#)